

報告者は、2019年5月29日から2020年3月20日まで、ルーヴェン・カトリック大学の客員研究員としてベルギーに滞在した。当初の予定では19年4月1日に渡航する予定であったが、ベルギー政府が同年1月1日付で施行した移民対策の新法により、従来から厳格で知られたベルギーの移民局による労働許可証（現地の大学で無給であっても必要）及びビザ発給の審査が一層厳しいものとなったため、出発が大幅に遅れることとなった。現地到着後も厳しい住宅事情により住居が定まらず、賃貸住宅に入居することができたのは6月下旬のことである。幸い、その後は大学図書館およびベルギー各地の文書館における研究調査を順調に進めることができた。

調査は、主として、中世後期のヨーロッパでもっとも都市化が進展したネーデルラント（ベルギー、オランダ地域）を対象に、市民の信仰生活と権力の関係についてのものであった。具体的には、破門や聖務停止といった教会罰、並びに巡礼をはじめ救霊の恩恵をもたらす宗教儀礼を考察対象とし、これらが君主や都市政府といった統治権力と被支配者たる市民の友好・敵対関係にどのような影響を及ぼしたかを明らかにしようとした。そのため、1425年創設のルーヴェン・カトリック大学所蔵の貴重な書籍・文書やベルギー各地の文書館に収蔵されている未刊行史料の収集と読解を進め、上記の問題を君臣間の紛争の具体的な文脈のなかで解明するよう心がけた。とりわけ、ヘントやブルッヘ、メヘレンやリエージュといった、かつて君主に対する大規模な反乱を展開した都市では、紛争の勃発から終結、和解に至るまで、様々な形で教会罰や宗教儀礼が活用されており、それらを読み解くことで、これまではもっぱら世俗的な政治的事象にのみ注目が集まっていた君主・都市間関係に、新たな視覚から切り込むことができたのではないかと考えている。そうした研究成果は、ルーヴェン・カトリック大学文学部 Paul Trio 教授の大学院生を対象とした講義において授業内講演の形で披露されており、その講演テキストは原語（オランダ語）のまま、報告者が進めている科学研究費

プロジェクトの研究報告書（2021年3月刊行予定）に収録することで、ベルギーの研究者たちにも広く公開するつもりである。

また、学会やワークショップへの参加を通じて世界中の研究者たちと交流を深めることができた点も、今後の研究に大きなプラスとなるであろう。それらの場では、かつて留学していたヘント大学のほか、アントウェルペン大学やブリュッセル自由大学の研究者とも、研究について意見を交換することができた。また、日本人と同じく外国史研究の立場からネーデルラント史研究に取り組んでいるアメリカやイギリスの研究者と今後の交流に向けての接点をもつことができたのも、たいへん有意義であった。さらに、ルーヴェン・カトリック大学日本学専攻で歴史学を専攻する教員や学生とも様々な形で交流を持ち、正反対の立場で歴史を研究している者同士として比較史的な観点から意見交換できたのは大いに刺激的であった。

ところで、報告者はもっぱらベルギーのみで調査を行っていたわけではない。14～16世紀にネーデルラントの諸地域を支配していたルクセンブルク家、ブルゴーニュ公家やハプスブルク家は、ヨーロッパ中に婚姻関係のネットワークを張り巡らせており、ブルッヘやアントウェルペンといった国際商業都市もまた北海・バルト海商業圏や地中海商業圏と交易ネットワークを通じて結ばれていた。そのため、ヨーロッパの様々な場所で現地調査を行う必要もあったのだが、この点でも充実した調査を進めることができた。14世紀にルーヴェン及びブリュッセルを中心としたブラバント公領とボヘミア王国を支配したルクセンブルク朝の拠点プラハ、ブルッヘ及びアントウェルペンに商館をもち、これらの都市と深い交流関係を結んだヴェネツィアなど、各地での調査は報告者に重要な知見と情報をもたらした。広く国際的な文脈で政治・経済関係を捉えようとする傾向が強い、近年の中世後期ネーデルラント史研究の背景を踏まえるならば、これも重要な成果といえるだろう。

こうした形で、今回の在外研究は順調に締めくくられるはずであったが、ベルギーでも20年3月に入り、新型コロナウイルスの流行が休息に広まる事態となった。同月11日をもって、急遽ルーヴェン・カトリック大学の授業は全面的に中止となり、18日正午より、国内全体がロックダウンに入ることとなった。航空機の往来がいつ止まるかもしれないなか、報告者も帰国の予定を前倒しせざるを得ず、20日の便に搭乗し翌日成田空港に帰還した。3月12日まで文書館での調査を行っていたものの、文書館自体の閉鎖もあって未刊行史料の調査が中断されてしまったことは悔やまれる。こうした点で、当初の目標を完全に達成することが叶わなかった今回の在外研究ではあるが、それでも、現地の研究者や近隣住民の助けを得て充実した滞在生活を送ること

ができたのは間違いない。こうした貴重な機会を与えていただいた大学関係者にも深い感謝の念を示しつつ、報告書の結びとしたい。